

# 福岡県移住者子弟留学生 第3回報告書（11月）

テーマ  
「勉強のこと」

ブラジル福岡県人会  
福山 真伊

九州大学大学院工学府

4月から九州大学で、都市環境工学の研究生として勉強しています。大学が始まってから毎週（夏休みを除く）教授とミーティングをしています。ミーティングは授業、そして研究についてお話しています。化学工学を母国で卒業しているので、環境の勉強は初めてで、日本に来る前、研究できるのか不安でした。しかし、教授と話し合い、普段研究室でやっている研究を1年でするのは短いとの事でしたので、環境工学の知識を少し学んで母国に帰る、というとてもいい提案をいただき、今現在実行中です。

まず初めに基礎を勉強しました。教授が重要だと思うテーマを出してくれて、自分で調べ、次の週何を調べたかを伝えました。最初に学んだのが、ブラジルと日本の環境基準（酸素、化学物質などの基準値）の違いでした。日本では、人の健康の保護、生活環境の保全などの基準に分かれていて、その中が河川、海域などに分かれています。

次に、福岡の博多湾を中心に研究をしました。博多湾で今も問題となっている「赤潮」についてです。赤潮は除去が難しいとされている窒素とリンという化学物質が、植物性プランクトンの栄養となり、異常に増え、水を赤く変色する現象です。その結果、水質が悪化し、魚などの生物が死にいたりします。

その問題は20年前に比べると、かなりよくなっている状態で、博多湾に設置されている下水処理所が大きく関わっていました。下水処理所は現在七つ設置してあり、一次処理（物理的に固形物の処理）、二次処理（有機物を微生物で処理）、そして18年前にすべての処理所に導入された高度処理（窒素やリンを化学的、物理的、生物的に処理）によって、放流される水質をよくしています。しかし、100%窒素やリンの除去は出来ていない状態で、特に、今も下水処理所では、窒素の除去の改善の研究を行なっています。

実際に、化学物質の量がどう変化しているのかについて、図書館で七つの下水処理所の40年間の放流水と流入水のデータをグラフにし、高度処理導入後、どう数値に影響したのかを勉強しました。40年前の高度な処理ができない年代と現在を比べたところ、やはり技術の進化のおかげで水質がよくなっているのがわかりました。

他にも、博多湾で実行されている海水淡水化システムの「まみずピア」、海水を真水にするシステムについて勉強しました。まみずピアは水を通して塩分を通さない膜を使って淡水化をしています。真水を取った後の海水の塩分は約2倍になっていて、下水処理水と混ぜて海の生物に影響のないよう塩分濃度を薄めてから、博多湾に放流しています。

下水道だけが博多湾へ放流しているのではなく、他にも農業や雨や河川も影響しています。そこで、博多湾自体のデータの回収をはじめ、高度処理導入後、

赤潮の植物性プランクトンの数、種類などの変化について、いくつかの論文を参考にして、研究しました。

現在、どの植物性プランクトンの種類が季節、酸素、窒素やリンの量で減るのか、又は増えるのかを調べています。

日本の大学での研究は、自分にとって新しいことばかりで、とてもいい刺激になり、親切にしてくれる教授と他の研究生たちと一緒にたくさん学んでいます。とてもいい環境で勉強させていただいていることに感謝しています。母国に帰り、得た知識を生かせるのを楽しみにしています。

最初の私の研究のテーマは、高齢者の住まいでした。そのテーマを研究したかった理由は、ブラジルで大学の時には「Instituto do Coração」と言う病院建築学科で研修して、そこで高齢者の問題に直面して、老人の住まいに興味を持つようになりました。それに、ブラジルの高齢者の人口が増えているので、日本はこの問題について、何年も対処しているからです。

高齢者の住まいでは、どんな家の設計が老人に住みやすい家になるかという事です。高齢者の住まいについて、先生と天神にある桜十字病院を見に行き、色々な経験が出来ました。その病院へ行った時、住まいの問題だけではなく、リハビリの事も習いました。しかし、研究室のゼミで発表した時に、先生からコンパクトシティをテーマにした方がいいと言われ、最初のテーマから変えました。コンパクトシティというテーマになりましたが、これも高齢者と関係はありません。

コンパクトシティとは、都市政策で「コンパクトさ」を特徴とする方針です。コンパクトシティという言葉が初めて使われたのは1973年でした。その時、二人の数学者がユートピアの街を提案し、1980年からヨーロッパでサステイナビリティという考え方が始まり、コンパクトシティが実現され始めました。

コンパクトシティはいろいろな戦略あります。例えば、住宅は高密度で、商業施設は住宅の近くに作るなど、適切な交通網があれば、皆商業施設や仕事に簡単に行けるようになります。コンパクトシティの戦略は世界中に使えます。日本もその戦略を使っています。例えば富山市と青森市は、コンパクトシティになっています。この二つの市は、高齢者にフレンドリーにもなっています。日本はアーバンスプロールの戦略があり、その時、皆車を持って、郊外のショッピングセンターの方を優先したので、都市の中心部は人が少なくなってしまう、店を閉めてしまいました。すると、2004年から政府が日本でもコンパクトシティを実装し始めました。

日本では、富山市はコンパクトシティになっています。そのプランの背景に、富山市の公共交通（JR、市電、他の電車とバス）の利用者数の減少がありました。

コンパクトシティとなった後は、利用者数が増えました。富山市の取り組みは交通のためだけでなく、住民の質を高めるために再生可能エネルギーを使うようにしています。

高齢者の住民のために、街の市電はバリアフリーになっています。そしたら、市電に乗る時階段がなく、ライトレール（富山市の他の電車）では高齢者を手伝う協力者もいます。また、街にはいろいろな所に老人のために増設したものがあります。例えば高齢者は、備え付けの歩行器を自由に借りることができます。

富山市では 2045 年に 4 割の人口は高齢者になります、世界には 2050 年まで都市部に住む 7 割の世界人口は、高齢者になります。そのため、各都市は老人の問題について、インフラとサービスが適応できるようにしないといけないと思います。

ブラジル福岡県人会  
矢野 マルシア 百合江

九州大学大学院人間環境学府

この1年間、九州大学の研究生として勉強をさせていただき、日本とブラジル県人会の皆さんに感謝しています。この経験を大切にして、より良い建築家になりたいと思います。

研究テーマは、特にきっちり決めずに日本に来ました。その理由は、まず私ができる事と日本建築の情報が、あまりよく分からなかったので、先生と決めることにしました。2016年の卒業論文のテーマは、私が生まれた地域を対象とした、サンパウロ市公園設計における都市再生でした。その研究がきっかけとなり、公園設計と大学キャンパスを基本的に勉強しました。

そこで、大学キャンパス専門の坂井先生の研究室に申し込みました。先生は、週に1回ゼミでお会いします。ゼミ以外では、研究室や、図書館、授業にいます。先生から、1年間の目標として、論文を一つ提出してはどうかと提案をいただきました。ゼミは坂井先生とブラサナ先生の研究生と一緒にしています。新しい研究と興味のあるテーマで論文を決めることになりました。読んだ論文を発表することはいつも大変です。授業もゼミも日本語で内容を理解するのが難しいですが、頑張っています。

研究室の皆さんは外国人が多く、中国や韓国の大学キャンパスの事についても、時々話をします。7月まで日本の大学キャンパスの論文を読んでいました。そして、夏休みの間も二つ論文を読んでいました。夏休みが終わるとすぐに、研究のテーマを「ブラジルの公立大学の特徴」に決めました。そのため、9月と10月は研究が忙しくなりました。11月までには終わるようにと先生から言われましたが、ブラジルのデータの集まりがなかなか難しく11月末には必ず終わりたいと思っています。

日本では、ブラジルに関する大学キャンパスの計画研究が、少ししかないのので、いつものアメリカやヨーロッパやアジアの研究と違って、ブラジルの状態も一つの勉強として、ブラジルの公立大学キャンパスの特徴を明らかにすることに決まりました。

研究方法に関して、まずはブラジル大学が歴史的に、フランスとアメリカのキャンパス設計計画から受けた影響を調べました。そして、ブラジル大学の

学生の生活や、キャンパス利用者の問題点を調べました。まとめて3つの公立大学キャンパスを選んで歴史と進化調査をしました。結論として、ブラジルは、南米の中で、少し違う大学の歴史があることを明らかにして、特に外国の影響とブラジルキャンパス計画について調査した。現在の国民の大学生の割合を調べて、利用者の問題点を明らかにしました。研究対象に選んだRio de JaneiroとBrasília連邦大学とSão Paulo州立大学で問題点の解決策を調べました。この研究はまだ調査中であり、結論ははっきり出ていませんが、頑張っています。

坂井先生とプラサナ先生の皆さんと、熊本研修と嬉野市の夏季セミナーに参加しました。熊本城と避難所の状態を見ました。別の日、家族会の皆さんと朝倉市で行った大雨の被害の案内をしてもらい、ボランティアもさせていただきました。雨の被害は母国にもあります。被害の影響は、ドローンで調査する方法の話も聞きました。

学校生活以外では、いろいろな県に旅行して、いい経験になりました。大学キャンパスの勉強は、母国に帰って仕事で使うかどうか分かりませんが、ゼミと論文を読んで、研究方法とデータの調査方法可能性がたくさんあり、ブラジルに帰っても、建築に関して論文を読み続けたいと思います。

ボリビア福岡県人会  
徳永 アレハンドロ 勇一

福岡調理師専門学校

4月4日、日本に来てから次の日には入学式があり、国際交流センターの方に会場まで連れて行ってもらいました。疲れはなかったのですが、知らない場所で知らない人達ばかりだったので、とても緊張しました。入学式を終え、学校に移動し、これからの一年間の流れを説明してもらいました。

学校が始まり、初めの週は、ひたすら自己紹介をする日々でした。先生方も、自分が留学生と知っていたせいか、いろいろお世話をしてくれました。他の人達も、自己紹介でボリビアから来たということで、近寄りがたかったそうです。ですが、授業を受けている間に、自分が普通に日本語を話せると知り、だんだん会話をしてくれるようになりました。今では、いい友達もたくさん出来ました。

福岡調理師専門学校には、公衆衛生学、食品学、栄養学、衛生法、食品衛生学、調理理論、食文化、サービス経営学、フランス語、調理実習の10科目があります。勉強は、漢字が多くて大変でしたが、それも勉強の一つなので、一生懸命覚えました。調理実習では、一班4人で回していくものでした。自分たちで役割分担をし、2時間という短い時間に3品仕上げるという内容です。

学校が始まり、1か月たったころに、初めての实習テストがありました。最初のテストだけあって、みんなとても緊張していました。試験は、人参のシャト一切りというものでした。先生が、試験中に出来ばえを見るので、手が震えて緊張していましたが、無事、合格することが出来ました。

次第に生活に慣れてきて、6月、学校の方では、最初の試食会がありました。ダークスーツを着て、今回は一流ホテルの会場で、中国料理をいただきました。そこで、中国料理をいただく際に、守らないといけないマナーや料理について、細かく説明してもらいました。また、今月は、鰻の三枚おろしの実習テストが行われました。試験では、相変わらず緊張していました。内容は、10分の制限時間中に鱗を取り、三枚におろし、骨を取り除くというものでした。この試験も無事にクリアしました。

夏に入り、学校では毎日クーラーがきいていて、とても快適に勉強に専念することが出来ましたが、実習ではクーラーを付けるわけにはいかないので、じわじわと茹でられる感じになりました。中には、体調を崩したり、立ちくらみをする人も出てきました。やっぱり料理の世界は厳しいなど、改めて思いました。



7月、夏休みに入る1週間前に、子弟招へのプログラムに参加しなくては  
いけなかったため、学校を欠席しなくてはいけなくなりました。子弟招への  
行事も無事に終わり、せっかくの日本での夏休みでしたので、沖縄と東京に行  
ってきました。そして、アツという間に夏休みも終わり、再び授業が始まりま  
した。

8月、夏休み明けには、筋の糸切りの実習テストが待っていました。3度目  
の試験だけあって、初めのころに比べて、緊張をあまりしなかったので、スム  
ーズにテストを受けることが出来ました。こちらも、無事合格することが出来  
ました。

9月には、前期学科テストがありました。全部の科目を3日間でやらなくて  
はいけなかったため、毎日、3科目以上のテストを受けました。テスト範囲が  
思ったより広がったため、徹夜で勉強しました。とても大変でしたが、何とか  
前期の科目を、全て合格することが出来ました。

10月にはすっかり秋になり、雨が多く肌寒くなってきました。前からやっ  
てみたかった、大根の桂むきのテストをやりました。思っていたより難しく練  
習をしている時、指を切ってしまいました。こつがなかなかつかめず、焦りま  
したが、出来ないなら、出来るまで数で覚えるしかないと思い、家で何度も何  
度も練習をした。結果、無事に合格することが出来ました。そして、2回目の  
試食会が行われました。また、スーツを着て今回は西洋料理をいただきました。  
とても美味しかったです。

11月に入り、学校で文化祭が開催されました。そこで自分は実技バトルと  
いうものに参加することになりました。そこで、桂むきをすることになりました  
が、決勝戦で負けました。悔しかったです。

これから、家族会の方で色々な行事に参加しながら学校の行事もやっていく  
ので、毎日、充実した日々を送っております。3月中に調理師免許が取れるよ  
う、これから、もっと頑張りたいと思います。皆様、これからもよろしくお願  
いします。

ペルー福岡クラブ

竹下 ケニー

九州産業大学芸術学部

今年の4月から九州産業大学で写真の勉強をしています。ペルーでは、大学で建築の勉強をしました。そのときは、いつもプロジェクトの写真を撮る必要があったので、写真も好きになりました。ペルーでは、写真の勉強をする機会がなかったので、いつも私は、インターネットか本か友達に聞いて習っていました。私は、いつも建築に加えて写真を勉強したかったのですが、ペルーではできなかったの、今年には写真を勉強できて嬉しいです。

私が大学に初めて行った日から、正しい事を選んだのを感じました。大きいスタジオ、いろんなカメラ、いっぱい写真に関するものを見てすごくびっくりしました。ほかの人から九州産業大学は写真の勉強で有名、と聞いて、本当だと思いました。今年の私の担当教員のあらまき先生は、すごくやさしいひとでした。今までいつも何か質問やわからないことがあったら、いつも先生が助けてくれて、とても感謝しています。

最初の日のことは、まだ覚えています。教室に入って、先生が写真の理論の話をして、ぜんぜん分からなくて、みんなプロフェッショナルカメラを持っていて、私はセミプロのカメラをもっていて、すごくはずかしかったです。時間が経つにつれ、私は少しずつ授業の内容を理解して、友達を作りました。

アナログの古いカメラで写真を撮った後、暗い部屋で現像をして、とても面白かったです。いつもテレビでしか見たことがなく、それを個人的に経験したことがなく、素晴らしい経験でした。デジタルカメラがなかったときの写真が、実際に分かったので、カメラと写真の開発プロセスと、一般的なメカニズムを理解することは、本当に面白かったです。

アナログ写真のことは、もう全部習いました。暗い部屋に入り、フィルムをカメラにいれます。イルミネーションを考えて、ピントをあわせて、マニュアルモードですきな写真を撮ります。その後は、カメラからフィルムをとって、カメラを直して、そしてフィルムと暗い部屋に入って、現像をします。このプロセスはあまりしないので、大学にある設備と教授のおかげでできて、すごくおもしろかったです。フィルムは、ライトや明るいところでは出してはいけないので、難しかったです。

スタジオの授業もありました。そこでスタジオのイルミネーションを習って、ポートレート、モデルと色んなオブジェクトの写真を撮りました。大学にあるカメラ、ライト、写真は、すごく新しいのでびっくりしました。ふつうの写真とスタジオの写真はぜんぜんちがうので、初めてスタジオでさつえいをしたときは、ちょっとむずかしかったです。でも少しずついろんなイルミネーションと写真の撮り方を習って、もっとかんたんになりました。あまり明るくなくて、暗くなくて、色んなライト、リフレクターとストロボのつかいかたは難しいけどおもしろいです。

セミナーは二人しかいないので、いいことと悪いことがあります。二人だけなので、たくさんのががならえます。せんせいといつも話して、何を習いたいか聞いてくれて、先生はそれをおしえてくれます。しかし、二人だけだとあまり友達が出来ません。でも、ほかの授業では友達を作れたので、あまりしんぱいりません。写真の編集とフォトショップは、建築で使えるため、すごく習いたかったので、セミナーの授業でいっぱい習ってよかったです。7月は、初めて写真の展示をしたので、すごく楽しかったです。先生とほかの人も、自分の展示をほめてくれてとても気分が良くなりました。

時々、授業で旅行をして、いろんなところに行って写真を撮ります。今年は佐賀、大宰府、志賀島と立花山にも行きました。そのときは、風景の写真とストリートフォトグラフィーのれんしゅうもしました。PC ルームでフォトショップと写真のエディットの勉強をしました。写真のイルミネーション、影、ライトと色をなおして、すごくきれいな写真ができました。

九州産業大学で、この7ヶ月、たくさん写真の事を習いました。アナログフィルムの現像、スタジオのさつえい、モデルの写真を撮って、コンピューターで編集をしました。大学で、自分の写真の展示もできました。授業がはじまったときは、展示がこんなに早くできると思っていませんでしたので、すごくびっくりしました。このような経験は二度とないので、あと4ヶ月は、さいごまでいっぱい写真の勉強をします。そしてペルーに戻ったら、写真の知識だけではなく、最初から今日までサポートしてくれたやさしい先生や友達を忘れずにいたいと思います。

メキシコ福岡県人会  
谷川 フロレス ホアン カルロス

九州産業大学国際文学部

お化けや怪物、幽霊や怨霊、怪談や都市伝説などを含めて、僕がこの一年間日本で研究している課題は恐怖物語です。僕は、文芸創作的な背景を持っていますが、須永先生の知識を学ぶために、テーマが民俗学的なアプローチを取りました。九州産業大学の国際文化部で宗教学、民俗学、日本人論、古典文学、近代文学と比較文化を勉強しています。前期に宗教学と民俗学の授業の中で、研究に関するテーマで気になったのは、アニミズムでした。アニミズムとは、世界のものすべてが、生物でも無生物でも、靈魂を持っています。そして、靈魂とは、肉体と別に存在するものです。この世とあの世の話は日系人として、日本文化とメキシコ文化のはざまに関係していると思います。先生達の説明を聞くと、恐怖について、日本人の見方は、少なくとも宗教的と情操的にメキシコ人と違います。日本文化とメキシコ文化を比較して、結果を組み合わせて、僕の研究に利用するつもりです。

はざまといえば、さらに学んだのは、ゼミナールに利用している本の中で、章を二つ選んで、それについて発表することでした。僕が選んだのは日系社会と学校の怪談でした。残念ながら、日系社会のテーマについては、うまく書けなくて発表できなかったので、パニックに陥り、学校を欠席してしまいました。国際交流センターはそれに気づき、須永先生と話していただいた結果、改めて出席して第二回目の発表がうまくできました。発表の準備の時に、ゼミナールの同級生が偶然、都市伝説と迷信について発表したので、彼の見解からも習うことができました。

夏休みの間、東京へ行って、浮世絵太田記念美術館で、月岡芳年のエキスポを見ました。その中で、新形三十六怪撰と和漢百物語という妖怪絵収集は、特に気になって、ずっと前から思っていました。月岡芳年の浮世絵を見たり記載を読んだり個々の話を分析して、あらためて気づいたのは、昔から幽霊と怨霊はほぼ女性ということです。

こういった思考回路を広げて研究を続け、後期のゼミナールーのレポートに発表するつもりでした。しかし、研究課題の複雑さをわかっていなかったため、で

きませんでした。民俗学に関してだけでなく、性役割や歴史にも関係していて、情報不足だったからです。

ただ、もう一度考えると、研究は無駄な努力ではありませんでした。その間、10月の末にゲストスピーカーとして、大学の交流会に参加して、英語でメキシコ文化に関して、お盆とメキシコの死者の日の比較をして、パワーポイントで発表しました。

この一年間が始まった時に、僕の目的は、比較、翻訳と創作のつもりだったが、計画を達成することはできませんでした。悔しいですが、今は小さなことでも満足です。研究からだけでなく、いろいろな所から多くのことを学んで、大事な教えを知ることができました。視点を変えて、研究を少しずつ続けて、また成長するつもりです。

トロント福岡県人会  
合戸 祐

九州大学大学院経済学府

前期は、特に自分のカナダの専門でもあった経営学、特にマーケティングの研究を集中的に行いました。ある授業では、シミュレーションソフトウェアを使い、株式会社という立場で各グループに分かれ、三ヶ月、ソフトウェアの現場で他社を上回るため、商品開発、人材派遣、研究開発、広告などに与える資金調達を行い、こういったものが、どう会社の株や売上などを左右するのかを研究しました。平均的に、一週間ごとに起きる結果発表後、会社の大量のデータを分析し、クラスにたった一人の外国人として、日本人と日本語だけで話し合うのは難しく感じました。数々の戦略や戦術を使い、ソフトの中とはいえ、たくさんの商品と資金を動かし、期間ごとに結果を推定し、他グループと駆け引きしながら競うのは、とても勉強になりました。日本語の結果発表のプレゼンも、今回が初めてだったので、日本語のプレゼンの仕方も、少し学ぶことができました。

大学のゼミ旅行、九大ビジネスコンペや、九州大学と商社のマーケティング共同研究ブートキャンプにも参加することで、経営学の研究もさらに深めることができました。ゼミ旅行では、ある地域を一つのブランドとして計画する課題を出されました。旅行先の現地の情報は、グループ自ら、現場で集め、データを分析し、その地域に合う計画を作り出しました。日本の地域からデータを取るのは初めてだったので、日本語の質問の聞き方の練習や、資料を読む良い体験になりました。九大ビジネスコンペでは、MBAのメンバーのグループに参加させていただき、ビジネスプランを作り、九大の学祭で、そのビジネスを実施しました。日本に長く滞在している留学生や、日本人の社会人との経営のグループワークは、大変勉強になりました。共同研究合宿では、大学教授と商社のマーケティングマネージャ指導のもと、ビジネスプランを策定し、商品開発を行う時の問題へのアプローチの仕方を学びました。

日本の歴史、日本の経済史を一番に日本で学びたいという意気込みで留学へ挑んだのですが、日本の歴史は想像していたより、はるかに困難で、日本の歴史はゼロから始めたため、前期は主に読むことが多く、なるべく多くの歴史の情報を学ぶことにしました。前期は、日本経済史や世界経済史のゼミにも参加することで、少しでも知識を深められるよう頑張りましたが、難しい経済の日本語になると、どうしてもついていけませんでした。そのため、少しでも文章の読み書きが上達するよう、日本語授業を今期は取っているのですが、カリキュラムに長文の読み書きが含まれていないため、教授の個人指導で、小論文の書き方の手伝いもしていただくことになりました。今期は、経済史の講義と環境経済理論のゼミに参加し、プレゼンなどを行うことで、経済の知識を高め、留学が終わる頃には、

現在興味がある日本経済史の CSR の変遷についてのレポートを書き終えたいと思います。

ハワイ島福岡県人会  
岩崎 ケリー カオリ

## 九州大学大学院地球社会統合科学府

自分の研究話題について考え初めたのは、最初は福岡のルーツを発見したかったからです。しかし、私は日本語を読むことができないので、私の教授は、他の話題を探した方がいいと言いました。そこで、私がハワイに戻ってからのことを考えながら、私は、県費留学生のグループに興味を持つようになりました。この県費留学生プログラムは、異なる世代の世界中からの日系人が、1年間同じ寮で生活する機会を提供してくれました。

私は教授のところに戻り、県費留学生の中の私、を研究の話題にする方法を教えてくれました。彼は、私たちの日々の活動の中で県費留学生の経験、思考、比較を記録することを提案してくれました。私は週に一度先生と会って、新しく発見したことや、異なる視点について書くことができないか議論しました。たとえば、県費留学生は日本、中南米、中米、北米、太平洋の文化的な違いを話していたので、それらを書くことにした。

最初のインスピレーションは、夕食における交流で感じました。私が到着した最初の日に、みんなが協力して夕食を作ってくれたことに、私はとても驚きました。なぜなら、ハワイの私の友人グループだったら、全く違う状況になったと思うからです。これらの違いについて考えたことが、私のレポートの基礎となりました。

私は、ハワイで農業のために必要な労働条件について学んだことがありますが、移住した多くの人々は、「ハワイに住んでいて良かった」と言っていました。そのような過酷な条件で、どうやって生き残って、家を建てることができたのか。しかし、県費留学生と一緒にいて、ここに住んでいて、私はしばしば「これが、彼らが移住した理由なのかなあ」と考えました。私たちの県費留学生プログラムと状況はまったく異なっていますが、今ではハワイの日系人の歴史をよりよく理解出来るようになりました。

ハワイで、彼らが仕事や生活を始めた時を想像すると、一緒に苦勞し、一生懸命働き、協力することで、彼らは生き残りや繁栄の機会を向上させたのだと思います。過去の違う状況でも、その時代の他の「県費留学生」と一緒にいることは、似たような励みを私にもたらしました。

到着したばかりの頃は、日本語が全く喋れず、無力で、何をしたらいいのかわからなくなることがよくありました。まさに、外国人が外国にいるように。県費留学生の



みんなと一緒に生活や旅行をしていると、県費のみんなの国々に、深い愛が芽生えはじめました。彼らは私が信頼できて、料理、掃除、一緒に売店や田んぼで働いたり、子供の面倒をみたりなど、最もシンプルで日常的なことでも一緒に楽しめる存在になりました。彼らは、毎日私にもっともっと日本語を教えてくれて、私が上達できるよう、励ましてくれます。お互いを支え合うことができるから、私は、ハワイから離れていても、「家」と呼べる場所ができたと感じます。最初の日から、県費留学生のみんなは私の家族になっていたのです。ここ日本で、私はアジア系アメリカ文学に関する本と、ここでの私の経験がどのように並行しているか、また対照的であるかについて読んできました。

アジア系アメリカのジャンルは、1900年代半ばから広がり、特に第二次世界大戦後の日本のアメリカ文学から拡大しています。Amy Tan、Jhumpa Lahiri、Maxine Kingston、Chang Rae Leeなどの著名人が、このジャンルに大きく貢献しました。

「キラキラ」「ニセイの娘」などの本が出回り、賞を受賞しています。これらの書籍のほとんどは、アメリカ人の中で人生を過ごしてきた人種、文化、アイデンティティのテーマについて書かれています。これらの経験は、第二次世界大戦中の抑留に関する経験や、社会に復帰しようとする闘争に大部分が限定されてきました。戦後の移民についての書籍は、アメリカに住んでいるときに直面していた第二世代の経験と世代間および文化的紛争から、通常にその話を物語っています。

三世の歴史を書かれた本は少ないですが、中には、デビッド・ムーラの「三世の覚書」や伊勢の文化と世代の違いに関する学術論文などがありますが、三世以降のことを書かれた本は、ほんの一握りしかありません。

ハワイでの日本人の経験は、戦争前後の米国大陸の経験とは大きく異なっていました。ハワイで日系アメリカ人の経験について書かれた本ですが、ここでも、ほとんどが一世から三世の話でした。「Picture Bride」、「Hawaii Under the Rising Sun」、「Rising Son's」などの本は、小川博士が書いた「Okage Sama De」と「Jan Ken Po」は、1970年代に三世と四世の経験、さらには県人会のハワイでの役割についても言及しています。しかし、私がお伝えしたいのは、文化、場所、世代を通して“逆移民”のテーマに焦点を当てた現代の日系人の経験です。

私の目標は、いつか、ここでの経験を含めて本を出版することです。私はいつか日本の文学のジャンルに貢献して、言語の問題や私の日本文化から離れていること、そして他の人と一緒に日系人としての個性を学んで共有することから得る喜びを分かち合いたいと思っています。